様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 ２７ 日現在

機関番号：３２６８６
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ１３４５５

研究課題名（和文）植民地期南米イエズス会布教区におけるキリスト教化と先住民社会の再編成

研究課題名（英文）Christianization and social change of indigenous society in the Jesuit missions in Spanish colonial South America

研究代表者
金子　亜美（Kaneko, Ami）

立教大学・異文化コミュニケーション学部・准教授

研究者番号：９０８３７２７０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、17-18世紀スペイン領南アメリカの辺境地域における修道会主導の先住民のキリスト教化を、実際に宣教に用いられた史料から明らかにした。 課題期間を通じ、(1)研究対象の史料の収集や複写、(2)史料の転写と分析、(3)文献研究を行った。(1)と(2)では南北アメリカ大陸諸国での史料調査にて収集した史料を対象とする基礎研究を進めた。(3)では、スペイン領アメリカにおける宣教活動という枠組みを中心としつつ、キリスト教や聖書についての人類学的研究や、先住民を含む書記活動の理解のためにリテラシー・スタディーズをレビューし、その学際的な動向に本事例を位置付けることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
南米の先住民社会は人格や関係性のあり方の点で他者性のきわだつ地域の一つとしてしばしば取り上げられてきた。しかし他者性を強調しすぎることにより、南米先住民もまた彼ら自身にとっての「他者」との出会いを通じた変容にさらされている事実や、彼ら彼女らをまなざす側もまた接触の過程で自らを変容させてきた事実が軽視されるおそれがある。
植民地期南米において先住民とそのキリスト教化に携わるイエズス会士がいかに交流し、双方がいかなる適応や変容を経験したのかを分析する本研究には、相手を変容させつつ同時に自己もまた変容する双方向的な過程を明らかにする点で、「他者性」をめぐる議論に新たな知見を提示する意義があった。

研究成果の概要（英文）：This study explored Jesuit-led Christianization of indigenous population in Spanish South America of 17th to 18th centuries from documents such as dictionary (Spanish and native language), catechism and musical scores used in their missionary activities. Three types of research were carried out. (1) Collection of historical documents in various archives in North and South American countries. (2) Transcription and analysis of the documents. (3) Theoretical review. In (1) and (2), I conducted basic research on documents collected during archival research. In (3), while focusing on the literatures on missionary activities in Spanish America, I reviewed anthropological studies of Christianity and the Bible, and literacy studies to understand the inscription activities, including those of indigenous peoples.

研究分野：文化人類学

キーワード：文化人類学　キリスト教　イエズス会　ミッション

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

南米大陸の先住民諸社会は、他者性のきわだつ地域の一つとして文化人類学者によりしばしば取り上げられてきた。とりわけクロード・レヴィ＝ストロースの構造主義にルーツをもつ存在論の立場は、当該社会における人格や関係性のあり方が、欧米社会とは大きく異なることを強調する傾向がある。しかし他者性を強調しすぎることにより、南米先住民もまた彼ら自身にとっての「他者」との出会いを通じた変容にさらされているという事実や、「欧米社会」を構成する側もまた、先住民社会への適用の過程で自らを変容させてきた事実が軽視されてきたのではないかと考えるようになった。

そこで、植民地期南米において、先住民とそのキリスト教化に携わるイエズス会宣教師がいかに交流し、その結果双方がいかなる適応や変容を経験したのかを、宣教に実際に用いられた諸文書を通じて分析することが有益と考えられた。

植民地期のスペイン領南米において、先住民のキリスト教化という一大事業の一翼を担ったのは、諸修道会の宣教師である。申請者が研究するチキトス地方（現在のボリビアとブラジル国境地域）で最初の宣教を行なったのはイエズス会である。彼らは 17 世紀末以降、この地方に先住民のための布教区を築き、周辺に散在していた多民族・多言語の人々を集め、定住生活を行わせた。人々はそこで「チキタノ」という一つの民族名称を担うキリスト教徒の集団となり、以来今日まで様々なカトリック実践を続けている。本研究対象が文化人類学における「他者性」の問題にとって示唆的であるのは、相手を変容させつつ同時に自己もまた変容する双方向的な過程を例証しているためであった。

２．研究の目的

本研究の目的は、イエズス会布教区時代（1691-1767 年）のスペイン領南米チキトス地方を舞台に、先住民と宣教師の交流を通したキリスト教化と当地社会の再編成の具体的な過程を、実際の布教に用いられた一次資料（辞書、典礼講話集・告解問答集、楽譜）から実証的に解明することであった。

３．研究の方法

本研究では、チキトス地方の先住民のキリスト教化に実際に用いられた以下 3 点の一次資料を対象とし、これを閲覧・転写の上、後述する観点から分析し、関連学術領域の研究蓄積に接合することを試みた。

(1) チキト語-スペイン語辞書・スペイン語-チキト語辞書（18 世紀）
(2) チキト語典礼講話集、告解問答集（18 世紀）
(3) 楽譜写本（17-18 世紀）

これらの史料は、キリスト教徒としての(1)言語のあり方、(2)慣習のあり方、(3)音楽を通した崇拝のあり方をそれぞれ規定し、先住民に学ばせるために作成された。とはいえそれはイエズス会の理念を一方的に押しつけるものでは必ずしもなく、在来の要素を大いに取り入れたものであった。本研究の目的にとって最適なこの 3 点の史料がいかなる信念のもとで作成されたのか、在来の概念や慣習をどの程度許容・拒絶したのか、当地社会の再編成にいかなる影響力を持ちえたのかを検討した。また、キリスト教の人類学、聖書の人類学、リテラシー・スタディーズ、アマゾニア民族学等、スペイン領やポルトガル領植民地におけるキリスト教化を扱う諸先行研究の蓄積を網羅的にレビューし本事例を位置付けた。

４．研究成果

本研究課題の成果として、まず史料や文献の収集が大いに進んだことが挙げられる。とりわけ 2019 年にはアルゼンチンのブエノスアイレス市における文書館調査により、複数存在するチキト語-スペイン語辞書・スペイン語-チキト語辞書の版の一つを複写することができた。この写本系統を把握する作業が必要となる。またミッション研究の中心の一つであるブエノスアイレス市で多数の先行研究を入手でき、その後の文献研究の継続が可能となった。

文書館調査

(1) アルゼンチン、ブエノスアイレス大学アラタ図書館にてチキト語-スペイン語辞書・スペイン語-チキト語辞書の閲覧および撮影（2019 年 8 月）
(2) アルゼンチン、ブエノスアイレス市の国立文書館にてチキトス地方の布教区の人口動態に関する資料の閲覧および撮影（2019 年 8 月）

次に、入手したチキト語-スペイン語辞書・スペイン語-チキト語辞書やチキト語文法書、チキトス地方で用いられた典礼書など、諸史料の転写の作業を進めることができた。このコーパス構築の作業によって、同史料の分析が可能となった。チキト語-スペイン語辞書・スペイン語-チキト語辞書からは、とりわけ親族名称やキリスト教関連の単語をピックアップし、近隣諸言語に関する先行研究とも比較しつつその系統関係を分析した。同地方で用いられた教会音楽の楽譜やイエズス会士自身による活動記録などの分析も継続している。

また、分析結果をミッション研究や言語人類学の翻訳論、文化人類学の他者論といった系譜に位置付けるべく、文献研究を網羅的に行った。とりわけリテラシー・スタディーズの学際的な蓄積やキリスト教の人類学、聖書の人類学、キリスト教のグローバルヒストリーの流れを把握するための文献研究によって、本事例をよりマクロな枠組みに接合することが可能になった。

本研究の成果は以下の通り公表された。まず、研究論文について、先住民のキリスト教化における言語の役割に関する研究論文（以下(1)）とキリスト教化に関する文化人類学的研究のレビュー論文（以下(2)）を投稿し、東京大学大学院総合文化研究科に博士論文（以下(3)）を提出した。(1)については日本文化人類学会奨励賞を受賞した。

(1) 「キリスト教化と言語：南米チキトス地方のイエズス会布教区におけるジェンダー指標の用法から」、『文化人類学』、84(4):503-521、2020 年 3 月（査読あり）。
(2) 「キリスト教化を通じた文化および社会の変容：文化人類学的研究の系譜と展望」『宇都宮大学国際学部研究論集』、49:27-39、2020 年。
(3) 「南米先住民の歴史とキリスト教 ： チキトス地方におけるカトリック儀礼の民族誌」（東京大学大学院総合文化研究科提出博士論文）

その他の出版活動としては、音楽に関する共著や辞典の項目、参考書の項目を発表した。いずれも本研究課題にもとづく文書館調査や文献研究をもとにしたものである。以下にある発表済みの成果以外にも、入門書の項目などが刊行予定である。

(1) 小倉 志穂、神野 知恵、田中 有紀、井上 さゆり、金子 亜美『音楽を研究する愉しみ:出会う、はまる、見えてくる』、より、分担範囲:「第一章 音楽は言葉を越える：南米先住民と他者、そして出会いを媒介する音」、2019 年、風響社。
(2) ラテンアメリカ文化事典編集委員会『ラテンアメリカ文化事典』より、「辺境地域」、丸善出版、2021 年。
(3) 横山 智, 湖中 真哉, 由井 義通, 綾部 真雄, 森本 泉, 三尾 裕子 編『フィールドから地球を学ぶ：地理授業のための 60 のエピソード』より、「20. 民族と言語 異なる民族や文化を理解する上で，言語はどのような役割を果たすのだろうか」、古今書院、2023 年。

その他、日本文化人類学会やアルゼンチンでの研究会（Territorio y circulaciones: Nueva historia global de la Iglesia católica y las prácticas religiosas）、スペイン国際人類学会議（AIBR，ポルトガル、ヴィラ・ノヴァ、オンライン）などでの口頭発表の機会に、本研究課題の成果を公表することができた。また研究発表の機会には、関連する分野の国内外の研究者と意見交換を行い、自らが研究する事例をよりマクロな文脈に位置付けることができた。

新型コロナウイルス感染症の影響で、2020 年以降は海外調査が困難となった。しかしそれ以前に構築していた上述の関係性により、研究者同士のネットワークを通じて重要な史料へのアクセスや研究へのフィードバックを得ることができ、研究を継続することができた。

昨今、世界的な拡大と地域社会への適応の間で揺れてきた数世紀の歴史を持つカトリック宣教および改宗、という問題に関するグローバル・ヒストリー研究が隆盛を極めている。本研究課題により得られた成果は、そうした知的潮流に対しチキトス地方の言語と音楽という事例から特筆すべき洞察を提示するものであると言える。数世紀に渡る世界宣教を繰り広げたカトリック教会には一般に、現地の住民に対していかにキリスト教の概念や崇拝の仕方を伝えるか、土着の慣習とどう折り合いをつけるかに関する試行錯誤の歴史がある。チキトス地方でも、植民地時代に読み書きを学んだ先住民自身の手になる史料が数多くみられ、キリスト教の教理を伝えるために現地語の親族名称が借用されていたことなどが判明した。他方で同じ「父」や「息子」という単語も、いずれの地域においても文化的、歴史的に語られ行為されてきたものである。先住民社会におけるそうした親族語彙の体系だけでなく、宣教師が持ち込んだキリスト教的含意をまとったスペイン語の親族語彙についても、今後さらに丹念に研究していくことが課題となる。

また、昨今ではキリスト教の聖書自体を脱親和化する動きも進んでおり、世界各地に持ち込まれたキリスト教の教理が興味深い仕方で現地のコスモロジーや宗教実践と接合していく仕方が解明されつつある。本研究課題を通じて、キリスト教の教理を現地人に伝える際に、宣教師

が親族語彙や動物、身体的なサブスタンス（血液など）、食物などに言及していたことが明らかになっている。こうした語を媒介として引き起こされた等言（equivocation、同じ言葉を使いつつ存在論的に別のものを名指すこと）の事例など、今後より体系的に検証していく必要があることがわかった。

以上の個別的であると同時に普遍性へと開かれた洞察を提示することにより、本研究課題は、地域・時代を超えた世界宣教に関する国内外での学術的対話に資するものとなった。引き続き事例研究と比較研究、理論研究を継続していきたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 金子亜美	４．巻 84(4)
２．論文標題 キリスト教化と言語：南米チキトス地方のイエズス会布教区におけるジェンダー指標の用法から	５．発行年 2020年
３．雑誌名 文化人類学	６．最初と最後の頁 502-519
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 金子亜美	４．巻 49
２．論文標題 キリスト教化を通じた文化および社会の変容：文化人類学的研究の系譜と展望	５．発行年 2020年
３．雑誌名 宇都宮大学国際学部研究論集	６．最初と最後の頁 27-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　3件）

１．発表者名 Ami Kaneko
２．発表標題 "Christianization and Language: Linguistic Anthropological Analysis on Gender Indexicality in the Jesuit Missions of Chiquitos, South America".
３．学会等名 Sexto Congreso Internacional de Antropologia AIBR, online edition.（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 金子亜美
２．発表標題 キリスト教化とローカリティの連続性／不連続性：アマゾニア民族学と言語人類学の接合にむけて
３．学会等名 日本文化人類学会第53回大会（東北大学）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Ami Kaneko
２．発表標題 Cristianizacion de amerindios y discontinuidad local: dinamica de intervencion y cambio de las categorias simbolicas.
３．学会等名 Territorio y circulaciones: Nueva historia global de la Iglesia catolica y las practicas religiosas. Instituto de Historia Argentina y Americana, Buenos Aires, Argentina.（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Akifumi Uchida, Kazuhisa Takeda, Ami Kaneko
２．発表標題 Charla: Los estudios latinoamericanos en Japon.
３．学会等名 Nucleo de estudios de Japon en la Universidad San Martin, Buenos Aires, Argentina.（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 金子亜美
２．発表標題 植民地期南米イエズス会布教区におけるキリスト教化と先住民社会の再編成
３．学会等名 第38回学問の倫理と方法研究会（宇都宮大学）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計3件

１．著者名 ラテンアメリカ文化事典編集委員会	４．発行年 2021年
２．出版社 丸善出版	５．総ページ数 780
３．書名 ラテンアメリカ文化事典（担当箇所「辺境地域」）	

１．著者名 金子亜美・小倉志穂・神野知恵・田中有紀・井上さゆり	４．発行年 2019年
２．出版社 風響社	５．総ページ数 88
３．書名 音楽を研究する愉しみ：出会う、はまる、見えてくる（担当箇所：「第一章　音楽は言葉を越える：南米先住民と他者、そして出会いを媒介する音」）	

１．著者名 齋藤晃（編著）	４．発行年 2020年
２．出版社 名古屋大学出版会	５．総ページ数 554
３．書名 『宣教と適応：グローバル・ミッションの近世』（翻訳担当箇所：ギジェルモ・ウィルデ「第一章　本質的なものと中立的なものの間で：南米植民地の辺境地域における宣教師の知識と適応」金子亜美訳、pp.54-87）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関